

この度、「卓越した大学院拠点形成支援補助金経費」を利用させていただき、博士論文提出直前の最終調査（10月8日～30日）を行うことができたので報告をいたします。

インタビューの調査地は大きく三つに分けられます。①ハノイ（10/9～15）：ベトナム人傷痍兵のインタビュー、NCCD<sup>1</sup>（ベトナム国内障害調整委員会）のインタビュー、VFD<sup>2</sup>（ベトナム障害者団体連合会）のインタビュー、②ホーチミン（10/16～22）：ベトナム人傷痍兵へのインタビュー、③台北（10/23～29）：康美華<sup>3</sup>氏へのインタビュー、台北市新活力自立生活協会の林君潔氏へのインタビュー。上述のインタビュー以外に、今回の渡航目的は、バリアフリーの概念が社会にまだ十分に浸透していないベトナムの都市において、東南アジア最大の商業施設（ハノイ）とベトナム唯一のノンステップバス（ホーチミン）の調査を行い、バリアフリーの進展具合を検証するものです。

ハノイ市における東南アジア最大のショッピングモールは、2013年7月にオープンしたばかりで、入口にスロープが設置されているなどショッピングモールの建築物自体は最新設備でバリアフリーです。しかし、実際に利用してみると、ショッピングモール前の歩道は段差があり、最新の施設であっても車椅子での単独の利用は難しいようです。（ただし、一般住民がすかさず手を貸してくれる）。このような設計は、ここ数年のベトナムにおける新しい建物で共通して見られるので、関係省庁に対し基準を見直すことを進言する必要性を感じました。

ホーチミン市では、ベトナム唯一のノンステップバス(2台)の検証を行いました。韓国のノンステップバスを輸入したことによる、バリアフリー路線なのですが、利用者の数と路線近辺の施設から考えて、同バスのバリアフリーの実用性に対して疑問を感じました。

台湾を調査する理由は、バイク社会の中に捷運(都市鉄道の名称)と公共交通バスを共存させることにより、バリアフリーを実現した台湾の事例を、バイクからバスへ利用者を移行させたいベトナムへの参考モデルとして明確にするためです。捷運が台北で開通したのは1996年であるため、一般市民からのアンケート調査では「当時のバリアフリーの状況を覚えていない」という回答ばかりで、実のあるものはなかなか得られませんでした。当時台北市のバリアフリーについて修士論文を執筆中だった康美華氏は、一般市民よりも、バリアフリーに対する意識が高かったようで、同氏に対するインタビューにより明確な回答が得られました。

今回の補助金により、8カ所でインタビューと調査を行い、紹介者や通訳とも議論する機会にも恵まれ、自分の論文の最後の補充ができることとなり、感謝しております。ただ、台風直撃によるフライトのキャンセルやインタビュー相手の急な出張により、当初の計画を完璧にはこなせなかったことが心残りです。この点は、博士論文終了後に、一研究者として継続したいと思います。



傷痍兵のインタビュー



VFDでのインタビュー



ベトナムのノンステップバス

<sup>1</sup> National Coordinating Committee on Disability の略。

<sup>2</sup> Vietnamese Federation on Disability の略。

<sup>3</sup> 「無障礙環境政策發展之探究--以台北市推動無障礙環境為例（バリアフリー環境の發展の研究—台北市のバリアフリー推進の事例）」の著者。